

オランダの国土整備技術を活かした 旭川のケレップ水制群

岡山県岡山市

中世以前の旭川は、龍ノ口山の西麓から数条に分かれて児島湾に注いでいました。中世末期の海岸線は操山の南麓のあたりで、それ以南は江戸時代に入ってから干拓された人工平野です。

現在の旭川の姿になったのは、宇喜多秀家が天正18年（1590年）から8年がかりで岡山城の大改築を行って以降とされています。その後、岡山城下を洪水から守るために数々の治水工事が行われ、承応3年（1654年）の洪水後には、熊沢蕃山考案の「川除けの法」が津田永忠によって3ヶ月で完成しています。ただ、この治水事業は城下町の約4km上流の旭川左岸側の堤防に荒手（越流堤）を設け、洪水時に越流させ上道郡（東南）の田畑へ注ぐもので、城下町は守られたものの、上道郡の被害は甚大なものでした。その後、治水と新田開発の両立を目指し、百間川の築堤、分流部で三つの荒手の整備、河口部で排水樋門群の築造が行われています。

明治初期、新政府によって河川・築港事業のためにオランダ人技術者が招聘されました。わが国に最も長く滞在したのはデ・レーケで、明治30年に離日するまでの約30年間各地の土木工事に携わっています。このデ・レーケとともに勲四等瑞宝章を叙勲されたのがムルデルです。明治12年（1879）エッセルに代わって来日した彼は、利根川改修や横浜築港計画などの運河や干拓計画調査に携わりました。明治22年の「児島湾開墾工事ムルデル氏説明書」には「旭川ノ下流ヲ改修スル事」として「此水路ヲ一途ニ定着セント欲セバ到底屈曲ノ部分ニ縦型粗架工事（低水面以上一尺ノ高サニ）を施し且横水制ヲ以テ之ヲ河岸ト連絡セサル可ラス」と記しています。しかしムルデルの提言は明治期には実施できず、ようやく昭和9年から旭川下流地区に設置されました。航路を確保するために、水深が浅い河口部の流れを岡山市の中心地側に寄せて水深を確保したT字型の不透過水制—これがケレップ水制です。今日まで大きな損傷もなく、19基が現存して水深維持に効果を発揮しています。なお、木曾川のケレップ水制群は、平成12年度土木学会選奨土木遺産に認定されています。



上空から見た旭川のケレップ水制（平井地区）

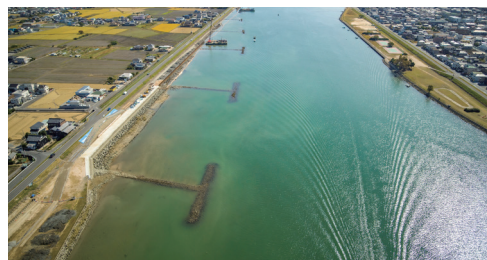
位置図



旭川と岡山城（岡山城は令和3年7月から4年11月まで大改修のため、それ以前の写真）



百間川河口堰



ケレップ水制（北畑地区）



ケレップ水制 近影